

身近な森を訪ねる

エコツアーに参加して

久保 一郎

くぼ・かずお
1928年 広島市生まれ
1945年 広島(爆心より1.3
km地点)にて原爆被爆
体験
1949年 旧制広島市工専
(現在 広島大学工学部)卒業
久保田鉄工株式会社(現
在 柳井機械関係)勤務・営業
建設会社関係・経営
販売会社管理・経営
1986年 定年退職 現在
札幌市白石区在住

はじめに

観光地周遊ツアーは別として、雨をも厭わず只々山頂を極める事に喜びを感じずる登山ツアー、野鳥を求めての探鳥会、野や山に湿原に花を求めてゆつくり自然を満喫するツアーと自然に接するツアーにも色々有るが。

当協会の「美林ツアー」は七年前に始まって以来連続して参加している人、本州から参加のためだけに来道される人、大半の人達が何回も参加していると言う事実、だけでもこのツアーが如何に魅力溢れるものか判って貰えよう。このツアーに参加した多くの人達の思いと、その素晴らしさを伝える事で、(伝わるかどうか不安を感じ乍も)協会行事として今後も続けられる事と、多くの人達、特に新しい人が一人でも多く参加される事を期待して筆を取る事とした。

私達夫婦が初めて参加したのは、昭和六三年(一九八八年)の第四回からだ。

過去、昭和四四年から十年間大麻に住み、当時、朝はカッコウの声を、裏の林にアカゲラを、池にはミズバショウを、又身近に数多くの野の花を、時折近くの原始林を散策する事で、心休まる思いした事

が懐かしく、仕事も終り、子供達も巣立ち、妻と二人だけになった今、北海道の自然に接したいと再び大阪より渡道した直後であった。妻は昔から野の花に茶花に、そして自然に興味と愛着を持ってはいたが、本州各地を旅行してそこに観る古い歴史の跡、歴史の物語り、歴史と繋がりを持つ建造物の美しさ、自然の中に溶け込んだ人工美、人工美と自然美の調和のとれた美しさ。それに比べて、森と湖と高原の美しさは有っても、歴史の無い北海道、自然美だけではと不満を感じていたものだが。こうした時に参加したのが「美林ツアー」であった。そこで蛇紋岩地層と植物の関係、旧花田家鯨番屋を只の建物として鯨漁華やかかりし当時を偲ぶに留まらず、それを通して森と海の関係、森が海を育て、海が鯨を育て、鯨が番屋を造らせ、番屋が出来て、森が、海が破壊されて、鯨が来なくなった一因である事を知る。北海道には歴史が無いと思っていたが、サロベツ原野に偲ばれる旧氷河期からの約二万年の地球の歴史、数千年かかって出来た砂丘の隊列、そこから人間の歴史など問題にならない自然の、地球の歴史を観る事で、私の北海道の自然に対する認識と価値観を変えてしまった。価値観の変化は是だけで無

くサロベツ原野を知りその後で松山湿原を観る事で湿原に対する考えも大きく変えざるを得なかった。今まで四十数年間、建設機械に係わって来た私にとって湿田は、湿原、泥炭地は只の不毛の地であり、その不毛の地を機械により暗渠、明渠を掘り、開発し利用する事で、社会に貢献して来たと思っていたが、それは只の不毛の地でなく、そこには歴史があり、自然の中での営みがあり、貴重な財産であると言う事であった。

又、幌延の高レベル核廃棄物処理施設誘致の現場近くを視察し、新聞紙上で知る表面的な事だけで無く、地質、水脈的にも問題がある事を知り、原爆体験から核に対して敏感な私にとって非常に興味ある事でもあった。

こうした事だけでなく、数多くのツアーに参加して来た私達夫婦だが、他では見られないこのツアーの魅力は、予め決められた行程通りに行動するだけで無く、時間の許す限り状況に応じて変更される事であった。

そのお蔭で、時間を延ばし、稚咲内より見た利尻、礼文の燃える様な夕景色の素晴らしさ、全く予定外の砂澤ビッキのアトリエ見学。又昼食はその都度場

所を探して野外で食べる弁当の味。毎年参加して来る人達との再会の喜び、自然大好きな人達との出会い、新たな友人も出来、付き合いも始まる、素晴らしい事だ。八木先生が行く先々でスケッチされて居るのに啓蒙され、私はビデオカメラを廻し解説はテープに取る事が未だに続いている。お蔭でその素晴らしい景色を何度でも再現する事が出来て、今では趣味として定着した。

この様に「美林ツアー」は多くの参加した人が其の人なりに多くの感銘を覚え、自然に接し、自然を知り、自然を考えて来た。

今年の「身近な森を訪ねるエコツアー」

例年、年一回の本ツアーも今年は二回行われた。

一、大雪山旭岳とその周辺

七月三日(土)―四日(日)

二、帯広・然別湖とその周辺

十月二日(土)―三日(日)

一回目の大雪山旭岳ツアーは時期からも行き先からも野の花を求めて参加された人が多く、帯広・然別湖ツアーは自然を求めての中に、自然とリゾート地・土幌高原道路問題をも考えるツアーであった。

札幌駅北口前八時一五分集合、皆様早い目に集まり出発が予定より早くなるのが常である。いそいそと早くから集まって来られる姿を見ても如何にこのツアーを楽しみにされていたか推察出来る(お年寄りの多いので早いのは無い)。バスの中では一年前の写真を手渡される方、一年振りの再会を喜び挨拶を交わし話が弾む。バスが出発すれば、協会福地さんの挨拶、行程説明、続いて俵先生の雨乃降られ之尊で始まる挨拶、然し今年も二回とも天候に恵まれ、尊の威力も地に落ちた様だ。本ツアーの特徴として解り易く適度に専門的な豊富な資料が用意

され、随所、随時、俵先生の専門外に迄及ぶ解説、又関係する図書、資料も持参されバスの中で回覧される。今年も穂別博物館が予定にあれば東京で見掛けたからと化石標本を購入して来られ回覧された。こうした俵先生、並びに福地さん、そしてかつての、八木先生のご努力に支えられ、意義あるツアーとして育てられて来た。並のツアーで無い事を参加した人達全員が感謝していると思う。ところでバスは札幌市内を抜け一、二号線を白石、大麻、野幌と走り野幌原始林を右に見てこの辺りの昔の住民と役場、森林との係わり合いを、又左に石狩川と千歳川との分岐点では今問題の千歳川放水路の解説を。

今は造成され宅地化されつつある幌向もこの間迄は泥炭地であり、ホロムイが頭に付いた花・ホロムイイチゴ・ホロムイソウ・ホロムイツツジ・ホロムイリンドウ等ここで発見されたと聞く。

バスは岩見沢の利根別自然休養林へ到着

大正時代に下流の水田地帯へ水を供給する為の人造湖の大正池、その水源を確保の為に伐採禁止とされた利根別の森林が現在の自然休養林となる。田村良介岩見沢営林署長の説明と案内を受け、春、夏、秋の時期に、野草、野鳥の自然観察に絶好の場所です。ゆっくりと再度訪れたいとの思いで後にする。

今まで旭川への道で通り過ぎていた、神居古潭で神居大橋より清流の中に珍しい欧穴を観る。橋を渡って九条武子歌碑を左に見ながら進むと旧神古潭駅舎が有る。次の予定地の北邦野草園と共に平素行きたくてもなかなか行けない所に行けるのも本ツアーの良さでもある。参加者が一様に是非一度訪れたかった所である北邦野草園で昼食の弁当を食べ、責任者の米倉武美主任の説明案内により園内を散策する。八百七十種の植物が道内固有有林より集められ植えら

れて自然に溶け込んでいると聞くが、時期的に早いのかクリソウ以外は余り目に入らず、やはり野草は植えられた物でなく自然の中に可憐に咲いているのを見出すのが最高であり、そこにも造られた自然と本物の自然の差を感じてやや期待外れであった。

次の道立二十一世紀の森への途中カラ松の植林が広範囲に茶色になっていたのと、二十一世紀の森でホウノ木の見事な花と香りが印象的であった。其の日の泊まりは旧勇駒別温泉の旭岳温泉白雲荘、我々一行の貸切りで、天然木とレンガのシャレた造りのレストランで会食、和気藹藹と話が弾む、常連の人、始めての人、ユーモアに富んだ自己紹介も例年の事である。透き通る程に透明で湯量豊富な温泉に浸かり月明りに旭岳を望み明日を楽しみに眠りに就く。

翌朝は希望者だけの予定が結局全員六時半より自然探勝路(見晴らし台コース)の散策に行く。降る様な鳥の囀り、アカエゾマツの林の中、エゾツカザクラ、コミヤカタバミ、ツバメオモト、サンカヨウ、クロウスゴの実、ゴゼンタチバナの花などに出会い、快晴の、早朝の、雄大な旭岳、大雪山連峰の遠望を楽しむ。散策後の朝食は殊の外食欲をそそる。期待の大きい旭岳見池周辺散策は、まずロープウェイ

見池駅を降りると一面の雪に驚く事から始まる。一週間前の山開きには大変な吹雪であったと聞くが、当日は快晴に恵まれ旭岳始め大雪山連峰の山々の眺望の素晴らしさ、しかし期待のお花畑は雪に覆われ、姿見池も夫婦池も凍結、可哀想に雪に傷んだキバナシャクナゲ、やはり少し早いのか、ミネズオウ、ガンコウラン、メアカンキンバイが咲き始めていた。寺島一男氏の同行により散策途中、随所で平素聞くことのない現地での懇切な説明に大いに見聞を

広める。帰り際には快晴であったのが見る見るうちにガスが立ち込め山の厳しさもチョッピリ味あう。ロープウェイを降り満開のチシマ桜を見る。今年是最初に広島で次に千葉でそして札幌で最後に旭岳でと四ヶ所の満開の桜に出合い日本列島の長さを感じたものである。

なだらかな曲線で起伏する丘を車窓に、美瑛の前田真三氏の「拓真館」に立ち寄り、全員悉無く、予定通り札幌帰着このツアーも終る

次に十月二日―三日の「帯広・然別湖とその周辺ツアー」に就いては与えられた紙面も残り少なく詳しくは機会があれば述べるとして、訪ねた先は「穂別町立博物館」平取の「振内鉄道記念館」で昼食「トマムリゾート地」それに隣接した「水野牧場」「サホロリゾート地」予定外の「神田日勝記念館」「然別湖畔温泉ホテル泊」夕食後ひがし大雪博物館川辺百樹氏のスライドに依る東大雪・十勝の解説を聴く。翌日は「土幌高原道路予定地見学」「坂本直行記念館」であった。

特に印象に残った事を述べると。穂別博物館では生物の誕生と歴史を、人間に繋がる哺乳動物の生い立ちをみる。俵先生の車中での背骨の有る動物の進化の過程、地球の地質時代と生物の変遷に就いても非常に有意義であった。沙流川の清流を上る自然の中に突然開けた整備された芝生、異様な四本の高層タワー・ホテル。なぜここに高級ホテルが・プールが・大規模のゴルフ場が必要なのか？なぜここで無くてはならないのか？どんな階層の人が利用するのか、庶民がどれだけ利用できるのか？利用した人も一生の内一度だけ日帰りか一泊ではないか、滞在型といえるのか、開発理念は有るのか、目的・需要に・地元の過疎化、経済優先主義の、企業社会の、国有

林の財政問題等多くの問題を観る。出来たばかりで「差押え」の経営危機も伝えられる。五十年先百年先はどうなるのか？スキー場予定地の国有林は、ゴルフ予定地として買い上げられた牧場はその儘放置され荒廃して行くのでは。各地でよく見掛ける経営不振のため放置されコンクリートの固まりの廃墟となったホテルをレストランを思い起こすと空恐ろしい事である。私の故郷広島に近い厳島の海に浮かんだ大鳥居、そして華麗な回廊、後ろの山の自然の緑又もみじと、調和の取れた美しさ、この自然と建物は平清盛以来八百年もの長きに亘って護られ受け継がれて来た、しかしそこには神の聖域として島民は様々の制約、生活上の犠牲、並々ならぬ努力があつてこそ護られたものと思う。私の子供の頃は回廊は土足禁止で靴を脱いだのが何時の日からか靴にカバーをかぶせる事になり今では土足である。

高級指向、便利さの追及だけで無く国土を自然を次の世代に残す為には其れなりの負担を担うべきであると思う。土幌高原道路予定地見学では千疊崩れを車窓より見る予定を変更して足を運んだ結果、多くのカメラマンが早朝から待ちかまえる中で、我々一行は現地に着くなり好運にも「チッ！」と鋭い鳴き声と共にナキウサギを見た感激は忘れられない。然し高原道路予定地近くの道路脇に推進派の人達により移植されたコマクサの姿が如何にも場違いで哀れで可哀想に思えたのは私だけであろうか。

神田日勝記念館ではその絵の中に北海道に住む十勝の開拓農民の生活の断片を観る。

自然の中にひっそりと建つ坂本直行記念館は北海道の山岳・植物画を観るにふさわしい雰囲気を持ち、心暖まる思いであった。

最後に非常に共感を覚えた車中での俵先生の「何

故 自然保護？」要旨を紹介する。

一、資源 人間は動植物のお蔭で生きてきた、現在は余り利用されず人間の役に立っていない動植物でも将来は非常に役立つ可能性を持っている。

二、経済 動植物は人間に経済的効果をもたらすものであり、失われた動植物を救う為には大きな経済的負担を負わなくてはならない。

三、リベット 生態系の一つ一つはジャンボ機のリベットの様なもので一本二本の欠陥では墜落こそしないが一本一本を大事にしないと地球全体の生態系が壊れてしまう。

四、カナリヤ 動植物は環境の危険を察知して危険信号を送ってくれる物である。

五、尊敬 野生の動植物も長い歴史の中で生きて来たのであり、人類の先輩でもある。其の存在価値を、その尊敬を充分認めた上でこれを保護利用すべきである。

おわりに

一般の人達が自然保護、環境保全を企業社会から、生活に追われる立場から考察した時どれ程の認識があるのか？

ロシアの核廃棄物の海洋投棄、海洋汚染も身に危険を感じれば問題となるが生活レベルを下げてでも省電力を省エネを考え、真剣に原発問題に取り組むまでには至らない。農業による人体への危険性からはゴルフ場問題を大きく取り上げるマスコミの人達ですら「緑の自然の中で云々」とゴルフ場に自然があると思ひ込みそれが生態系を破壊して造られ、又生態系を破壊し続けているとの認識が無いと思われ

る人がいる。

無農薬野菜にしても全く意に解さ無い人が多い中で折角関心をもって購入して置きながら野菜に虫が着いていたと文句を言う人がいる。一般はこのレベルと考えるべきである。

ニセコの神仙沼湿原の入口に環境保全の為に浄財をと箱が置いてある。こうした事は各地で大に行われ協力すべきと思う。しかし今の社会情勢からは盗難は、有効に使われるのか、と疑問を持つ人もいると思う、そうなる社会の仕組みは、教育は、政治は、と何も出来なくなる。自然保護、環境保全も何処かの地域の問題だとか、他人事でなく、意味は異なるが俵先生の言われるリベットの如く、一人一人が実生活の中で何を実行するかである。次の世代に残し引き継いで行く責任と義務がある。其の為にそれなりの負担も、不便も、制約も、甘受すべきと思う。

自然保護を知識としてでなく、自然を肌で感じ、肌で考える事から始まる。其の為には本ツアーとか、観察会等の果たす役割は大きく、こうした普及活動に期待する所大である。



士幌高原道路予定地



ヌブカの里より東ヌブカウシの山々

(写真提供
江部靖雄氏)